

翻 訳

ハンガリーにおけるモンゴル研究の始まり：  
セントカトルナのガーボル・バーリントのカルムイク人および  
ハルハ人に関するフィールド調査 (1871年・1873年)<sup>1</sup>

The Beginnings of Mongolian Studies in Hungary:  
Gábor Bálint of Szentkatolna's Field Research  
among the Kalmyks (1871) and the Khalkhas (1873)

ビルタラン・アーグネシュ

(エトヴェシュ・ローランド大学モンゴル・内陸アジア学部)

BIRTALAN, Ágnes

(Department of Mongolian and Inner Asian Studies, Eötvös Loránd University)

翻訳：島 村 一 平

(滋賀県立大学)

Translated by SHIMAMURA Ippei

(The University of Shiga Prefecture)

目 次

はじめに

1. ガーボル・バーリントの人生に関する諸事実と研究に関する歴史的背景
2. バーリントのモンゴル語の手稿資料について
3. バーリントの調査旅行とその方法論
4. バーリントのモンゴル語資料の言語学的価値
5. カルムイクとハルハに関する民族誌学・民俗学・宗教学的資料としてのテキスト・コーパスの評価  
さいごに

はじめに

セントカトルナのガーボル・バーリント Gábor Bálint of Szentkatolna (1844-1913) は、膨大な知識と幅広い関心を持ったハンガリーの学者であるが、後半生において言語学的親和性に関する物議を醸すような持論を開陳したことで知られている。とはいえ彼は、キリスト教化したタタール人の言語

<sup>1</sup> (訳注) 本稿は、Birtalan, Ágnes 2016, *The Open-Hearted People of Chinggis Khaan, Ulaanbaatar* を原著者自身が要約した英語原稿の翻訳である。

(1871年)やカルムイク語(1871～1872年)、モンゴル語標準語すなわち西ハルハ方言(1873年)のコーパスを集積したという輝かしい業績を残している。タタール語の資料はバーリント自身の手によって出版されたが、後にアールパード・ベルタ (Árpád Berta) によっても出版されている。モンゴル語の方言資料に関する手稿はハンガリーや外国の研究者の関心をひいたものの、その批判的に検証された著作の出版は、近年まで待たなくてはならなかった<sup>2</sup>。(ハルハ語の資料<sup>3</sup>はいまだに検証と校訂の最中である)

そこで本論では、以下の点に焦点をあてながらバーリントの学術的遺産を紹介していくものとする。

1. 初のモンゴル口語の大規模コーパスの言語学的価値(カルムイク語およびハルハ語)
2. 当時のハルハ人とカルムイク人の民族誌学・民俗学的資源および宗教観を知る上での資源としてのコーパスの評価
3. 国際モンゴル研究におけるバーリントの学術的遺産の位置づけ

## 1. ガーボル・バーリントの人生に関する諸事実と研究に関する歴史的背景

セントカトルナのバーリントは、1844年3月13日、セントカトルナ、すなわちトランシルヴァニアのケーズディヴァーシャーヘイ(現在のルーマニアのトゥルグ・セクイエスクの近く)に生まれ、1913年5月26日、トランシルヴァニアのテメシュヴァール(現在のティミショアラ)で亡くなった。彼は比類なき言語学の才能をもっており、彼にとってお手本だった学者、アレクサンダー・チョーマ・ド・ケーレス Alexander Csoma de Kőrös (1784-1842、ハンガリー語では ケーレシ・チョマ・シャールンドル Kőrösi Csoma Sándor) の夢を実現しようと望んだ。そして出来る限り多くの言語をマスターしたいと考えた。さらに彼の出身民族であるマジヤール系のセケル人 Sekels (ハンガリー語ではセーケイ人 Székely) の起源の地を探るために多くの文化に通暁したいと思った。彼は子供のころから熱心に勉強をしていたが、大学生になるとウィーンで(のちにはブタペシュトで)さまざまな学部で法学や人文学などを学んだ。成長するにつれて彼の関心は、東洋の言語へと向かい、調査対象となるエスニック集団のところでフィールドワークをするべく準備をはじめた。(彼のフィールドワークの手法については下記を参照のこと) 当時の一流の学者であったアールミン・ヴァームベリ Ármin Vámbéry (1812-1913) は、バーリントに大きな影響を与えたのであるが、そのヴァーンベリ

<sup>2</sup> Gábor Bálint of Szentkatolna, *A Romanized Grammar of the East- and West-Mongolian Languages. With popular Chrestomathies of both Dialects.* (ed.) Birtalan, Ágnes. (Budapest Oriental Reprints: Series B 3) Budapest, Library of the Hungarian Academy of Sciences - Csoma de Kőrös Society 2009; Birtalan, Ágnes: *Kalmyk Folklore and Folk Culture in the mid-19<sup>th</sup> Century. Philological Studies on the Basis of Gábor Bálint of Szentkatolna's Kalmyk Texts.* (Oriental Studies 15). Budapest, Library of the Hungarian Academy of Sciences - Elista, Kalmyk Institute of Humanitarian Studies of the Russian Academy of Sciences 2011.

<sup>3</sup> *Bálint Gábor: Keleti mongol (khalkha) szövegek.* (88 pages), Nr. Ms1379/2; [Bálint, Gábor: Eastern Mongolian (Khalkha) texts].

の紹介で、精力的なハンガリー語研究者であり、『ハンガリー語辞典』<sup>4</sup>の編纂者の一人であったヤーノシュ・フォガラシ János Fogarasi (1801-1878) が彼のパトロンとなった。最初にフォガラシは、ハンガリー科学アカデミーに対してバーリントをモンゴル諸語の研究調査のためにアジア派遣させるよう推薦した。フォガラシはハンガリー語とモンゴル語には言語接触があったのではないかという仮説をもっており、それを証明するような証拠資料をバーリントが持ち帰ってくるのではないかと期待していたのである。

19世紀後半は、複雑な民族主義が交錯しており、英雄的な過去や称賛すべき前史時代を探し求める潮流があった。当時は、いわゆる「ウゴル—テュルク論争<sup>5</sup>」が行われていた。そこではハンガリー民族とハンガリー語の起源を巡って、二つの学派がフィン・ウゴル系出自なのかテュルク系出自なのかを立証しようと争っていたのである。バーリントは、いくつかのテュルク系言語やフィン・ウゴル系言語を含めてかなり多くの言語をマスターしていたのは疑いようのない事実である。しかし、彼はハンガリー語の接触を言語学的見地から探求するだけでなく、単純に感情的にもその起源を探し求めていたように思われる。実際、当時の時代精神 (Zeitgeist) が人々を極論へと突き動かし、抑制できなくなっていたのである。

調査旅行に関する説明およびハルハ口語とカルムイク口語 (vernacular Kalmyk and Khalkha) のための文法書に記された、モンゴル語に対応するハンガリー語の注釈を見てみると、バーリントはモンゴル語にハンガリー語との親和性を見出していたように思われる。そしてほとんどのハンガリー語・モンゴル語の同義語については、『ハンガリー語—モンゴル語の相似 *Párhuzam a magyar és mongol nyelv terén*<sup>6</sup>』という著書の中で議論されている。彼の主要なパトロンであるヤーノシュ・フォガラシへの書簡の中で、バーリントはハンガリー語の言語接触の問題を慎重に扱っている。それは彼の著書『文法』の中で論じた方法と同様で、「假定上の相似 (ほとんど語彙素についてで、まれに語の派生形態についても扱った)」というに留めている。その中には、後に言語学者によって証明されたものもあった。例えばリゲッティ Ligeti によって、何十年をかけて否定されたものもあった<sup>7</sup>。おそらく、将来のデータ収集や研究に結び付くようなアイデアがこの仕事には含まれていることだろう。

## 2. バーリントのモンゴル語の手稿資料について

ハンガリー (トランシルヴァニア) の研究者、セントカトルナのガーボル・バーリント (1844-1913) の残した手稿は、国際的にあまり知られていない。しかしハンガリーにおける過激派運動家たちにとって、彼の名前はかなりの称賛の対象となっている。その名声は、ハンガリー語の起源に関する非科学的な思考に依拠していた。さらにハンガリーの民族的起源に関しても歴史学的に間違った理解に基づいていた。とはいえ科学者として歩み始めたころ、彼はすでに学術的な著書や学術的に非

<sup>4</sup> 著名であるが物議を醸すこの辞典は、方言と口頭語彙のシーソラスである。Czuczor, Gergely – Fogarasi, János: *A magyar nyelv szótára*. (『ハンガリー語辞典』) 1862 – 1874の間に出版された。電子版 (CD-ROM) はブダペシュトで出版された, Arcanum 2003.

<sup>5</sup> Cf. Pusztafay 1977.

<sup>6</sup> Bálint 1877b.

<sup>7</sup> Cf. the thorough discussion in: Ligeti 1977.

常に価値の高い独創的な論稿を生み出している。残念なことに生前にそれらが出版されることはなかったのであるが。モンゴル研究に関して言えば、バーリントはカルムイク口語およびハルハ口語の大型コーパスを記録した最初の学者として評価されるべきであろう。二つのモンゴル系言語の19世紀の発音を永久に書き残した彼の優れた表記法とともに。

ハンガリー科学アカデミー付属図書館の希少本・写本管理部Department of Manuscripts and Rare Booksには、バーリントの生前に未発表の以下の3冊のモンゴル語の手稿（未出版）が保管されている。

1. 『西モンゴル語（カルムイク語）テキスト』*Nyugati mongol (Kálmik) szövegek.* (全184 ページ), Nr.: M. Nyelvtud. 4/109.
2. 『バーリント・ガボールの東モンゴル語（ハルハ語）テキスト』*Bálint Gábor: Keleti mongol (khalkha) szövegek.* (全88 ページ), Nr.: Ms1379/2.
3. 『東西モンゴル語のローマ字表記の文法：二つの方言の民間文選』（全222 ページ）, Nr.1: 81 szám, Nr.2: Ms 1379/1.<sup>8</sup>

バーリントが、これらの貴重な資料を出版することはなかった。フィールド調査の記録の文字起こしを終えたとき、すでに彼は当時の言語学や歴史学における主流派から敵対視されるようになっていた。学術の世界で容認も歓迎もされなくなっていたので、事実上彼は自身の資料の出版を断念せざるを得なかったのである。実際のところ、『文法』の手稿本が彼の唯一の完成された著作だとみなしてよい。フィールド調査に基づいた二冊のコーパス手稿には、なんの説明や分析、翻訳がほどこされないトランスクリプションのみの部分が含まれている。しかし『文法』の抜粋文部分には、バーリントによる英訳つき簡略標記の中にハルハ語およびカルムイク語テキストの多くの実例specimensが含まれている。

私は10年以上前から、モンゴル語に関するバーリントの学術遺産に関する研究をはじめ、ようやく5年前にその一部を出版にこぎつけた。以前に私はカルムイク語記録*Nyugati mongol (Kálmik) szövegek*（『西モンゴル語（カルムイク語）テキスト Western Mongolian (Kalmyk) texts』（以降、『カルムイク語記録*Kalmyk records*』と呼ぶ）を詳細に研究し、出版した。『文法』に関しても、解題をつけて出版している。この解題では、まずバーリントのテュルク語系口語とモンゴル口語の調査旅行に注目して、彼が体系的に整理した文法的な観察結果の持つ背景などを論じた。さらにバーリントがハンガリー語と関係があると考えて探求した諸言語につき、その調査意図を論じたほか、バーリントが整理したモンゴル口語の比較文法の価値を強調しておいた。

カルムイク語に関する手稿には、さまざまなジャンルの民俗伝承や民族誌的なサンプル・テキス

<sup>8</sup> 『文法』の正式なタイトルは、*A Romanized Grammar of the East- and West-Mongolian Languages. With popular Chrestomaties [sic!] of both Dialects. Containing alliterative Folk-Songs, Anecdotes, Conversations, Fables, Proverbs, Prayers, Letters, Writs and the Description of the Characteristical Usages and Housekeeping of the Mongolians; every piece with faithful Translation, by Professor G. Bálint of Szentkatolna.* 『東西モンゴル語のローマ字表記の文法：二つの方言の民間文選、頭韻体の民謡、小話、寓話、ことわざ、祈祷詞、書簡、令状、特徴的な語用の記述、モンゴル人の家政の記述（すべては、センカートルナのG.バーリント教授の忠実な転写によるもの）』

トになるようなものに加えて日常会話のサンプルや口語や文語の用法の事例となるような公的書簡が含まれている。私はこの『カルムイク語記録』を出版したが、そこで文献学的なアプローチを行うと同時に、特にいくつかのジャンル群に関してカルムイク人に関する、より広範な資料的背景（パラス<sup>9</sup>のモノグラフから現代の系統だった研究<sup>10</sup>にいたるまで）を分析した。このバーリントのカルムイク記録の比較研究を通して、カルムイクの言語学および文化的な独自性が明らかになったのである。その一方で、当時のバーリントによって記録された膨大な言語学的・文化的諸現象は、後世の資料にも確認されており、現在に至るまでカルムイク人が言語・文化を連続的に継承してきた事実を証明するものともなっている。

さらに私はバーリントの第三の手稿、すなわち『東モンゴル語（ハルハ語）テキスト Eastern Mongolian (Khalkha) texts』 (*Keleti mongol (khalkha) szövegek*、以降、『ハルハ語記録 *Khalkha records*』と呼ぶ) についても調査しており、独自の視点から分析したテキスト群および特殊なテキスト群を出版した。その中でも最も特徴的なハルハ・コーパスは、「聖なるチンギス・ハーンの黒冊から選んだ言葉 (*Činggis bogdo xānē xara depterēn dotorās ɣaryakson uge*)<sup>11</sup>」という題のものである。これはモンゴル仏教の出現に関して、一人のラマが語ったものである。私は、このテキストを19世紀のモンゴル人の宗教的アイデンティティという文脈の中で論じた。ほかに『ハルハ語記録』の中で、特に私が注目したテキスト群は、謎かけ遊びのコーパスである。私は同時代の希少な資料である M. A. Castrén<sup>12</sup> 記録や、後代に Kotwicz, Ramstedt, Bukshan and Matsga<sup>13</sup> などが記録したテキスト・コーパスを参照しながら、それぞれのなぞなぞ（オニソゴ）を比較しようと試みた。しかし出版できたものは数少なく、いまだ『ハルハ語記録』という完璧な労作とその分析作業が私の目の前に残されている。

### 3. バーリントの調査旅行とその方法論

セントカトルナのガーボル・バーリントは、当時流行ったハンガリー人の民族的「起源地 (*Urheimat*)」にかかる諸仮説や、そうした「起源地」とハンガリー語との類似性の考察に魅せられていた。そこでハンガリー科学アカデミーの仕事を引き受け、1871年、アルタイ系言語を話す民族のフィールド調査に出発したのである。最初に調査したのは、キリスト教化したカザン・タタール人であった<sup>14</sup>。

バーリントが最も努力をしたのは、「最も純粋な言語」を記録するということだった。それは音の言語—現実の口語を意味した。この目的のために、彼はアストラハンのいくつかの学校を訪問して、カルムイク民俗語 *Kalmyk folk tongue* を記録した (1871年9月～1872年5月)。さらに彼はシベリアを横断し、いくつかのブリヤート方言 *Buryat dialects* についても詳しくなった。しかしながら彼は、自身の経験と記録に基づいたブリヤートに関する総合資料を出版することはなかった。とはいえポ

<sup>9</sup> Pallas 1776, 1801.

<sup>10</sup> Cf. the Bibliography of Birtalan 2011.

<sup>11</sup> 宗教的アイデンティティの観点からの分析としては Birtalan 2012 がある。

<sup>12</sup> Castrén 1857.

<sup>13</sup> Kotwicz 1972, Ramstedt; Halén 1974, Bukshan, B.; Matsga, I. 1960

<sup>14</sup> Berta 1988.

ルドーノフ Boldonov<sup>15</sup>によってブリヤート語 Buryat language で記されたキリスト教の教理問答<sup>カテキズム</sup>に基づいて、彼はブリヤート語の文法書を出版したのだった。このブリヤート語の文法書はバーリントの生前に出版されたのであるが<sup>16</sup>、そこから彼のモンゴル語文法や構造に関する深い見識が確認できる。

1873年、彼はウルガを訪問しハルハ方言の一異形 variant を記録したが、それはたった数人のインフォーマントから集めた記録だった。その中でも重要な一人が、黒い (既婚の) ラマであった。ラマの名をヨンドンジャムツ (バーリントの転写では Yanden Dsamcza) といった。この遊行のラマを語学教師とすることで、バーリントは単語や表現や文、あるいは民族誌的および民俗伝承テキストを聞き取って記録したのである。

「私はラマおよび彼が私のために呼び寄せてくれた人々のうち聞き取りができた数人からすべてのことを音声学的な方法で書きとめていった。155日間を通して、それ以外のことは何もしなかった。私はラマといっしょにゲセル・ハーン物語という寓話を全部読んだ。そしてそれを口語のまま筆写していった。特記すべきは、わがラマは読み書きができなかった no literator [バーリント原著ラマ] が、私が学んだ多くの人々より経験もあり賢かった、ということである<sup>17</sup>」

#### 4. バーリントのモンゴル語資料の言語学的価値

カルムイク口語 Kalmyk vernacular に関する初期の記録<sup>18</sup>の中でも価値のあるものはあるが、バーリントの研究こそが科学的に系統立ててなされた最初の記述研究だといってよい。ただしラームン Rahmn の集めた資料<sup>19</sup>は、ある程度バーリントの『文法』に匹敵するものだといえよう。バーリントは、フィールド調査において、口語の調査に没頭し、なるべく言語が実際に話されている形で記録しようと努めた。しかしながらその価値を称賛する前に、私は彼の転写の中に、それさえなければ素晴らしい転写といえるような、細かい問題点があることを指摘しておきたい。それは、彼のテキスト転写が、口語の持つ独自性 peculiarities of the vernacular を完全に反映していないという点である。言語学上の先行研究に基づいてバーリントは、日常会話の発話を正確に記録するため非常に厳密な表記システムを考案した。しかし、その中に文語的な特徴が散見されるのである。確かに彼は細心の注意を払って体系的な表記法を考案した。しかし、口語の記録時にある作業方法を編み出した結果、口語と文語の二面的な特徴 dichotomous nature が出現してしまったのである。彼がデータの記録時にどんな作業方法を編み出したのかは、彼自身による注釈や書簡などから簡単に復元することができる。まず彼はインフォーマントにテキストをオイラト文語 written Oirat で書き記してくれるよう頼んでいた。彼のインフォーマントたちは、中学校の教師や生徒たち、そして彼の滞在先の

<sup>15</sup> Boldonov 1862.

<sup>16</sup> Bálint 1877.

<sup>17</sup> Birtalan 2009, p. 5.

<sup>18</sup> Doerfer 1965.

<sup>19</sup> Svantesson 2009a and 2009b.

家族であった。ここでいうテキストとは、民俗伝承や自由な会話、民族誌的な話題に関する語りなどのことをさす。そしてバーリントは、以下のような方法でオイラト文語をマスターしたと語っている。

「民謡の記録のあと、さらに難しい統語構造を持つ民謡の記録へと進んだ。これら(民謡)は、さまざまな部族出身の若いカルムイク人たちによってカルムイク文字で書き記されていった。若者たちの中には中学校の生徒もいれば、医学校の学生もいた。他に小学校の生徒もいた。彼らは優秀な語り手たちだとみなしてよい。先生が私のためにカルムイク文字 (Kalmyk script) <sup>20</sup>で書き記されたこれらの民謡を、人々の発音にしたがって一文、一文ずつ繰り返し読んでくれた。こうして、私がラマに音読して間違っただけ聞き取った事例に関して、(その部分を)訂正をもらって原稿をつくったのである。文法的な分析や民謡の翻訳などは、後から行った。このような作業で集めた民謡のコレクションには、カルムイク文字で記された15の長めあるいは短めの民謡が含まれている。それらは簡略なハンガリー語による翻訳も付されている。カルムイク語の発話から記録されたすべてのテキストは、2種類の方法で表記された(すなわち、カルムイク文字とその翻訳である)」<sup>21</sup>(傍点、筆者。ただし原文では太字)

バーリントは、ハンガリー科学アカデミーに宛てた『報告書』の中で、作業上の次のステップとして、インフォーマントにテキストを音読してもらい、インフォーマントの発音に従って音声テキスト *sounding texts* を転写するという方法をとったと言及している。ところが、音声テキストの中にオイラト文語の特徴が残っていた。このことから導き出せる結論は、以下のような点であろう。まずフォークロア・テキストや民族誌的な語りを聞き取った際、インフォーマントたちは文語から離れて自由に話すことができなかったという点。次にオイラト文語を一文字ごとに発声して読んだ場合に発音されるだろう、表記上の文字が挿入されていたという点である。

バーリントのカルムイク語テキストにおいて、明らかに書き言葉が音声テキストへ与えた影響として *b* の文字が表記されているという点が挙げられる。*b* は(書き言葉を)転写する際、常に *b* として転写されるが、話し言葉の語法の中では時折、[w] の音になる。しかしながらバーリントは、文字単体が発音されるべき音で表記するのである。例えば *b* 音素として聞き取りようがない異音に対しても、常に彼は *b* で表記している。ところが他の事例では、彼はいくつかの異音を区別できているのである。バーリントは、オイラト口語とカルムイク口語における *b* 音の表記法における位置(語中と語尾)の特殊性、すなわち摩擦音化 *spirantise* にも従っている。以下、バーリントによるカルムイク語転写 (Bálint) とカルムイク口語 (Kalm.)、オイラト文語<sup>22</sup> (W.Oir.)、モンゴル語文語表記 (Mong.)、ハルハ口語 (Khal.) の事例を示しておこう。

<sup>20</sup> バーリントは、トド文字をカルムイク文字 (Kalmyk script, Hung. Kalmük írás) と呼んでいた。

<sup>21</sup> Bálint 1875, 12. 残念なことにカルムイク文字で書かれた資料はバーリントの遺稿集資料の中から発見されていない。

<sup>22</sup> (訳註) 著者は、トド文字による文語をオイラト文語 *Written Oirat* と呼んでいる。

「13」

Bálint *arban γurbun*, Kalm. *arwn γurwn*, W.Oir. *arban γurban*, Mong. *arban γurban*, Khal. *arwan gurwan*,  
「息子」

Bálint *köbün*, Kalm. *köwün*, W.Oir. *köböün*, Khal. *xū, xöwün* “son”.

モンゴル語系言語と方言においてカルムイク語の顕著な特徴は、語頭以外の位置における強い母音弱化である。それは、他のモンゴル語系言語では、母音が単純に省略される形で示される。このような事例において、バーリントはときどき、シュワー（曖昧母音）の位置に *e* を挿入している。例えば、「県」を意味する語についてバーリントの表記と現在の学術的表記やラムステッドによる表記などを比較してみると以下のようになる。

「県」

Bálint *äimek*, Kalm. *āmg*, cf. Mong. *ayimay*, Khal. *aimag*, Ramstedt (シュワーを使用): *ām<sup>g</sup>*

また第一あるいは第二音節に /i/ がある場合、バーリント式では、後に来るシュワーが *i* で転写される。

「カルムイク」

Bálint *xal'imik*, Kalm. *xal'mg, xalimg*, W.Oir. *qalimay*

バーリント方式のその他の重要な特徴として挙げられるのが、二重母音をテキストの中に表示するというやり方である。モンゴル語文語やオイラト文語で表記される二重母音がオイラト方言やカルムイク語には欠如しており、二重母音は長母音と置き換わるので、単母音化する。しかもカルムイク口語では、語頭以外の長母音は短縮化され、単母音に聞こえる。

「このような」

Bálint *eīme*, Kalm. *īm*, Ramstedt *īm*, W.Oir. *eyimi, eyimū*, cf. Mong. *eyimü*, Khal. *īm*

これらは数少ない事例ではあるが、特殊な記録方法によって生じたバーリントの表記法の二面的特徴が如実に示されているといえよう。彼は最初にインフォーマントに対して、テキストをオイラト文字で書き記すことを依頼し、その後それを彼ら自身の方言で読み上げるよう依頼した。語頭以外の音節のシュワーの位置における *e* の出現は、極端に短くされたシュワー様母音の一種であるといえる。またバーリント式がカルムイク口語における長母音に対して二重母音を採用しているのは、書き言葉の痕跡なのであった。

ハルハ語テキスト *Khalkha texts* の分析に関しては、非常に複雑であり、現時点では分析作業中である。ここでは、ハルハ語記録において言語学的に顕著な特徴をいくつか提示しておこう。現時点でのテキスト分析においていえるのは、すでにカラ教授も強調しているが、かなりの数のテキストにおいて、西ハルハの音声的特徴が反映されている<sup>23</sup>。

<sup>23</sup> Kara 1962, 163.

最も突出した西モンゴル (および西ハルハ)<sup>24</sup>の音声的標識は、多くの事例において単語の中で狭母音 (palatal vowels) を伴った*x*の表記に*k*を使用している点である。例えば、以下のような事例である。

「亡くなった人のあとで (儀礼を) 行う」

Bálint *uk'usen k'unēken xoinōs kēdek*, Mong. *ükügsen kümün-ü ki qoyina-ača keyideg*, Khal. *üxsen xüni xoinōs xīdeg*, Oir. *üksn künē xōnōs kīdg*

西ハルハのほかの事例を挙げるならば、円唇性の調和 (labial harmony) の欠如である。

「中から、そのうち」

Bálint *dotrās*, Mong. *dotor-ača*, Khal. *dotrōs*, Oir. *dotrās*

カラ氏は、バーリントの主要なインフォーマントであった45歳のラマがハルハ西部の出身だったのではないかと推測している<sup>25</sup>。将来的には、慎重な分析をおこなっていくことにより、このテキスト群のもっと正確な方言的特徴に光が当てられることになるだろう。バーリントは日記の中で、彼のチューターであったラマは読み書きができなかった (彼はチベット語の読み書きはできたがモンゴル語の読み書きは出来なかったという意味) ので、カルムイク人のインフォーマントたちがバーリントのために行ったようなテキストを読んだり書いたりすることができなかった、と書き残している。このハルハの事例において、文語的な形態の出現は除外できるのである。バーリントは以下のように書き残している。

「ヨンドンジャムツという名の私の先生、ラマができることは少なかった。彼は流暢に話すことで知られていたが、モンゴル語が書けず、チベット語のみで書くことができた。モンゴル人聖職者にとって母語で書くことは手に負えないことで、時には母語で話すことさえ手に負えなかった。しかし金が彼を饒舌にしてくれた。私がうれしかったのは、彼は聖なるチベット語の書物以外は何も興味を示さなかったことである。またどちらかというとなり有名なモンゴル語の経典も同様に知らなかった。だからこそ、コワレフスキーの辞書を使いながらも、彼は私に口語を教えることができたのである。ラマは、ロシア領事館のとなりになり引越してきたので、私の依頼に応じて、一日二回、私の家を訪ねることができた<sup>26</sup>」

## 5. カルムイクとハルハに関する民族誌学・民俗学・宗教学的資料としてのテキスト・コーパスの評価

ハルハ語、カルムイク語の両資料の中で会話文の資料を除くと、ほとんどの部分は、様々なジャンルの民俗伝承や遊牧生活における様々なテーマに関する民族誌学的な語りで構成されている。またハルハ語資料集には、仏教に関する重要な語りも含まれている。とはいえ、バーリントの研究手

<sup>24</sup> In detail cf. Bese 1964.

<sup>25</sup> In detail cf. Birtalan 2012.

<sup>26</sup> Bálint 1875, 14.

法および彼の書簡（指導教員や研究仲間への手紙）などに基づいて言うならば、彼は本物のフィールド研究者ではなかったように思われる。彼はより多くの牧畜民や農民といった人々を求めてフィールドへ出かけようとはしなかった。その代わりに、むしろアストラハン、カザン、ウルガといった都市に滞在し、限定されたインフォーマント集団に対してのみ調査をしていた。彼のインフォーマントは、アストラハンでは、学校の生徒や教員とその親戚のみだったし、ウルガではラマと数人の友人だけであった。しかしこうした事実は、彼の現地の口語the vernacular研究と現地語the native tongueによる土着文化の記録という偉大な成果の価値を貶めるものではないだろう。上述のとおり、ある意味データが限定的となった理由も彼の記録内容の中で示されている。

現代のフィールド研究上の問題の文脈にしたがって当時のバーリントの民族誌的資料を検証してみると、バーリントのデータは正しいことがわかる。というのも仮にインフォーマントが「失敗を犯している」ように見えたとしても、バーリント自身がインフォーマントの信頼性を疑っていたからだ<sup>27</sup>。

『民族誌*Ethnographica*』のテーマに関して、バーリントは細心の注意を払って話し言葉の資料から土着文化のコンテクストを構成しようとした。彼はトランシルヴァニアの出身でハンガリー人および少数民族セーケイ人Székely<sup>28</sup>双方の民俗文化に親しんでいた。したがって彼は遊牧系民族のフィールド体験を、子供のころ体験した先住民文化と関連付けて考えることができたのである。しかしながら、彼のインフォーマントの知識は限定的であったともいえる。というのも、第一にカルムイク人のインフォーマントはほとんどが若者であった（参考までに彼らは単純な言語運用力しかもっていなかった）のであった。第二にハルハのラマのインフォーマントはモンゴル仏教の諸現象を説明しようとしていたものの、それは彼が僧侶階級の周縁つまり半僧侶半俗人のような人物の視点から理解したものに過ぎなかったからである。にもかかわらず、バーリントはインフォーマントから得た資料を助けに聖俗両方のモンゴル人像を構築することができたといえよう。そのことは、カルムイクとモンゴルの『民族誌*Ethnographica*』において、ひとりの俗人モンゴル人の生活や土着文化が描かれているが、その刮目に値する描写からうかがい知ることができるのである<sup>29</sup>。

## さいごに

ここで私が指摘しておきたいのは、国際的なモンゴル研究におけるバーリントの記録の位置づけについてである。バーリントは、『文法』においてサンプル・テキストを含むカルムイク口語とハルハ口語の語法に関する二大資料を蒐集した。彼の蒐集した口語事例examples of the vernacular、とりわけ寓話や歌などは、モンゴル語方言の口語の語法や民俗伝承資料を紹介した最初の試みだと位置

<sup>27</sup> 「カルムイク人の中にいたときと同様、バーリントはハルハでも民謡を蒐集することに興味を持っていた。彼の『報告書』の中で、彼のラマ先生が歌を即興で作りはじめたと、寛大な皮肉とともに書き記している。そんなわけで彼は、民謡を記録するために他のインフォーマントを探したのだった（例えばLusin Dords バーリント式表記ではLusin Dorj）。（Birtalan 2009, XV, on the basis of *Bálint Gábor jelentése* p. 14）。

<sup>28</sup> （訳註）ルーマニアのセーケイ地方に居住するハンガリー系の少数民族。

<sup>29</sup> 民族誌的な語りと民俗伝承のテキストの詳細な内容については、次を参照のこと。ハルハ・テキスト：Birtalan 2009, 141-178、カルムイク・テキスト：Birtalan 2009, 179-221 and Birtalan 2011, 17-19。

づけることができよう。残念ながら、これら貴重なテキストは蒐集直後つまりバーリントの生前に出版されることはなかった。一方、ドイツの高名な文献学者ベルンハード・ユルグ Bernhard Jülg (1825-1886) がモンゴルに関する要約論文の中で高く評価したのは、バーリントではなくポズネーエフの仕事だった<sup>30</sup>。A. ポズネーエフの民謡コレクションは、話し言葉の形態をキリル文字で表記する方法で転写されたものである。このコレクションは確かに斯界における世界初のデータベースであるが、非常に扱いにくいものである。仮にバーリントのコレクションが計画通りに出版されていたならば、一そもそもそれはフィールド調査の旅から帰国直後を予定していたのであるが一彼の資料は世界初という名声をほしいままにしていたことであろう。しかも、彼のコレクションはよりまとまったものとして編集の手本にもなっていたにちがいない。

バーリントの記録の言語学的価値については、以下のようにまとめることができる。

第一に187ページのカルムイク語 Kalmyk および88ページのハルハ語の手稿 Khalkha manuscripts は、カルムイク口語およびハルハ口語に関する最初の大規模コーパスであるという点である。第二にテキストの転写方法が優秀かつ正確であるので、これらのテキスト群はさらなる言語学的研究をする上においても、19世紀の当該言語の文化背景を調査するという点においても適切な資料となるという点が挙げられる。第三に異なる文化背景を持っていたり、様々な方言話者であったりと多様なインフォーマントから提供されたテキスト群という点において、方言の差異にかかる研究に新たな光を当てる可能性があるという点も挙げられよう。

謝辞：本論を翻訳するにあたり、東京外国語大の山越康裕氏に大変有益なアドバイスをいただいた。また査読者にも非常に有益な翻訳に関する助言をいただいた。記して謝意を表したい。

#### [参考文献]

- [Bálint, G.] 1875, Bálint Gábor Jelentése Oroszország- és Ázsiában tett utazásáról és nyelvészeti tanulmányairól. Melléklet öt Khálmik dano hangjegye, *Értekezések a Magyar Tudományos Akadémia Nyelv- és Széptudományi Osztálya köréből*. IV (1875), 1–19. [Gábor Bálint's Report on his Journey in Russia and Asia and on his Linguistic Studies. With Notes of Five Kalmyk Songs. In: Treatises from the Department of Linguistics and Aesthetics of the Hungarian Academy of the Sciences] Reprinted by Kara 1975.
- Bálint, G. 1877a, Az éjszaki burját-mongol nyelvjárás rövid ismertetése, *Nyelvtudományi Közlemények* XIII (1877), 169–248. [Brief Description of the Northern Buryat-Mongol Dialect].
- Bálint, G. 1877b, *Párhuzam a magyar és mongol nyelv terén*, crown 8vo. pp. xxx and 62, Budapest, 1877. [Parallelism between the Magyar and Mongolian Languages].
- Berta, Á. 1988, *Wolgatatarische Dialektstudien. Textkritische Neuausgabe der Originalsammlung von G. Bálint 1875–76* (Keleti Tanulmányok – Oriental Studies). Magyar Tudományos Akadémia Könyvtára, Budapest.
- Bese, L. 1964, Two Western Khalkha Tales, *AOH* XVII (1964), 49–67.

<sup>30</sup> 「結論として、私はしばしば引用するポズネーエフの偉大な仕事に特別な注目を喚起しなくてはなるまい。彼はモンゴル人の民衆文学を初めて我々に紹介したのである」Jülg 1882, 53, 65.

- Birtalan, Á. (ed.) 2009, *Gábor Bálint of Szentkatolna, A Romanized Grammar of the East- and West-Mongolian Languages. With popular Chrestomathies of both Dialects.* (Budapest Oriental Reprints: Series B 3). Library of the Hungarian Academy of Sciences – Csoma de Kőrös Society, Budapest.
- Birtalan, Á. 2011, *Kalmyk Folklore and Folk Culture in the mid-19<sup>th</sup> Century. Philological Studies on the Basis of Gábor Bálint of Szentkatolna's Kalmyk Texts.* (Oriental Studies 15). Library of the Hungarian Academy of Sciences, Budapest – Kalmyk Institute of Humanitarian Studies of the Russian Academy of Sciences, Elista.
- Birtalan, Á. 2012, The Black Book of the Holy Chingis Khan: Remarks on a 19<sup>th</sup> Century Mongolian Folklore Source, *Northeast Asian Studies* (Tohoku University) 16 (2012), 245–259. On the Internet: <http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/bitstream/10097/53696/1/1343-9332-2012-16-245.pdf>
- Birtalan, Á. 2014, Gábor Bálint of Szentkatolna (1844–1913) and Władysław Kotwicz (1872–1944) on the Kalmyk Language, *RO LXVII* (2014), 1, 55–75.
- Birtalan, Á. 2016, The Open-Hearted People of Chinggis Khan, Embassy of Hungary in Mongolia, Eötvös Loránd University, Department of Mongolian and Inner Asian Studies, Mongolian National University of Education, Mongolian Studies Center: Ulaanbaatar.
- Boldonov, N. [S.] 1862, *Daida delkhein ushir. O miroizdanii.* Tip. Shtata voisk Vostochnoi Sibirii.
- Bukshan, B.; Matsga, I. 1960, *Khal'mg ülgürmüd boln täälwrtä tuul's.* Khal'mg ASSR-in degtr gharghach. Elst [Kalmyk Proverbs and Riddles].
- Castrén, M. A. 1857, *Versuch einer burjätischen Sprachlehre, nebst kurzem Wörterverzeichnis,* (Nordische Reisen und Forschungen von Dr. M. Alexander Castrén 10 ed. Schiefner, Anton). Kaiserliche Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg.
- Doerfer, G. 1965, *Ältere westeuropäische Quellen zur kalmückischen Sprachgeschichte (Witsen 1692 bis Zwick 1827).* (Asiatische Forschungen 18). Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Jülg, B. 1882, On the Present State of Mongolian Researches, *Journal of the Royal Asiatic Society.* (New Series) XIV (1882), I, 42–65.
- Kara, G. 1962, O neizdannikh mongol'skikh tekstakh G. Balinta, *Narody Azii i Afriki* 1. (1962), 161–164.
- Kara, Gy. 1973, *Bálint Gábor keleti levelei. Jelentése Oroszország- és Ázsiában tett utazásáról. Értekezése a mandsuk szertartásos könyvéről.* Kőrösi Csoma Társaság, Budapest [Gábor Bálint's Eastern Letters. His Report on his Journey in Russia and Asia and on his Linguistic Studies. His Treatise on the Ritual Book of the Manchus].
- Kotvich, V. L. 1972, *Kalmyckie zagadki i poslovitsy.* Kalmytskoie knizhnoie izdatel'stvo, Elista.
- Ligeti, L. 1977, Mongolos jövevényszavaink kérdése. In: *Nyelvtudományi Közlemények.* XLIX. (1935) pp. 190–271. Republished: Ligeti, Lajos: *A magyar nyelv török kapcsolatai és ami körülöttük van.* I. (Budapest Oriental Reprints. Series A 1.) Ed. Edmund Schütz – Éva Apor. Magyar Tudományos Akadémia Könyvtára – Kőrösi Csoma Társaság, Budapest pp. 202–283. [The problem of the Mongolic loanwords in Hungarian. In: Linguistic Proceedings].
- Pallas, P. S. 1776, 1801, *Sam[m]lungen historischer Nachrichten über die mongolischen Völkerschaften I–II,* Kaiserliche Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg.
- Pozdneev, A. 1880, *Obraztsy narodnoi literatury mongol'iskikh plemen. Narodnyia pesni mongolov.* Tipografiia Imperatorskoi Akademii Nauk, S.-Peterburg.

Pusztay, J. 1977, *Az “ugor-török háború” után*. Magvető, Budapest [After the “Ugrian-Turkic war”].

Ramstedt, G. J.; Halén, H. 1974, *Nordmongolische Volksdichtung* II. (MSFOu 156). Suomalais-Ugrilainen Seura, Helsinki.

Svantesson, J.-O. 2009a, Cornelius Rahmn’s Kalmuck Grammar, *Turkic Languages* 13, (2009), 97–140.

Svantesson, J.-O. 2009b, Cornelius Rahmn and his Work on the Kalmuck Language, *Northeast Asian Studies* 13, (2009), 111–126.